紹介

生活と社會

中村孝也編

題して「生活と社會」と云ひ、國民生活史研究と銘うつてゐる。收むるところの論攷七篇、何れも國民生活研究所の俊秀最近の勞作を以てし、中村博士の序言「生活と社會」の金文字を揭げて、その抱懷される綜觀的な歷史認識の構想の下に論叢を成したと稱せられてゐる。本書はその第一册であつて、今後引續いて同樣の意圖による業績を問はれる計畫であると聞く。その壯擧の發足は先づ慶賀すべきものである。

偖生活と云ひ、社會と云ひ、これらの語は明確な意味に於いて、アカデミックな史家の語彙を賑はすこと從來は稀であつた。歷史はこの樣な言葉を以て把握されるところとならなかつたからである。從つてこゝに「生活と社會」と題された意圖は極めて注目に値する。併しながらそれにも拘らず生活と社會とこの二つの概念ではなほ充分に明かにされてゐない。表題のよつて來る所以は、先づこれが國民生活研究所の事業であることに諒解されるが、中村博士の序言によれば、この究研所の目標は日本國家に就いてその「生活」の本質を究明することを主眼とし、その生活は國家的集團生活に於いて考慮されると定められてゐるに基くものであつた。概念の曖昧さは問はず、この樣な言葉の意味するところは私共の平素私かに抱いてゐる歷史への關心と近似するものゝあるを想ひ、この綜達の先達に率ゐられる一群の有志を見出して衷心の欣懷を抑へ得ない。

ところがこの同じ道を進むに就いて、博士と私共とは步み方に根本的な相違がある樣に思はれる。その提唱される方法論に關して尠からぬ疑惑を藏するものである。併しながら今日はまだ私共はその「政治史學」の具體的な業績に接してゐない。寡聞にしてこの「豪壯な構想」の展開された實踐的な段階に立入つてゐないために、この二十頁の小篇によつて愚見を披瀝することは差控へる。唯々この次には何か書くつもりであるとの御約束に期待して、博士の該博な學殖に觸れて御教示を得たいと翼望するのみである。

中村博士の構想は措いて、この書に收められた七篇の論攷は何れも卓拔な意見であることは申すまでもない。その多くは未開の部分への犀利な觸手を伸べられ、眞摯な論陣を張られた。洵に同慶の至りである。この全部に就いてこゝに述べる餘裕がないから二三私見を陳べるに留める。

上代儀禮の變遷と社會思想　阿部武彥
行基と日本佛教　細川公正
名田經營の成立　松本新八郎
戰國諸侯間の政治的交通　新城常三

農民生活とキリシタン信仰　岡田章雄
近世農民の家族生活　北島正元
明治初年の社會史的一考察　小西四郎

「上代儀禮の變遷と社會思想」は喪禮を中心として攻究され、前後の二章より成る。前章には喪禮の變遷過程を述べてこれに對する倫理觀を說き、死に對する思想の變化を明かにしてゐる。土葬と火葬との相違が喪禮に著しい信仰の變化を與へたことは認められるが、古代社會に於ける墓制に就いての見解は皮相的である。高塚墳墓の大陸起源及び少數の限られたる人々の採用であることは考古學の常識であり、我が國のその古式のもの〻分析は、當然固有の墓制への反省を伴ふものである。且つ薄葬が支那に顯著な思想であつたとしても我が國の薄葬奬勵がその影響にのみ出でたとするのは早計であらう。考古學は如實にこれを教へてゐる。薄葬を奬められる文章とその典據との比較は更に多くの問題を教へるものであると思ふ。後章には荷前の奉幣が平安朝以來凶祭視されたことを取上げ、これを中心として荷前儀禮と陵祭との意味を考へたものである。陵祭の吉凶二面觀の交錯することは、確かに神聖觀念の淨汚の構造に認められるし、荷前が元來吉禮の新穀感謝の意をもつものであつたことも亦明かである。これが新嘗の祭との關係に就いて支那の行事との比較に筆を進められて曆法の二重構成に結びつけてゐられることも示唆するところ多いが、一を農業生活、一を都市儀禮に置くのは理解し難い。都市の儀禮とは

都市生活のもつ儀禮としか考へられないからである。

「名田經營の成立」名田は古代より中世にかけて土地利用の顯著な形態であつた。莊園體制の研究の盛行と共にこの問題も屢々取扱はれ、多くの意見が行はれてゐる。それらに對してこの一篇は過去の業績の反省と再出發の意味をもつてゐる。豐富に展示された史料も極めて便利である。氏の提示されたところは時を同じくして出た清水三男氏の研究と併せ考へる時に興味深いものがある。

その他「農民生活とキリシタン信仰」はこの信仰が近世初頭の農民の間に浸透して村落生活の多樣の面に接着してゐたことを述べ、「近世農民の家族生活」は家族關係、勤勞生活を描いて、それが都市生活との交渉により變質して行くことを述べ、從來民俗學として隔離されてゐた傳承史料の價値をも認めてゐることなど村落生活への關心の强く見られることも注目を惹くものである。

（A列五號　四〇八頁　小學館　四圓）（平山敏次郎）

公家文化の研究
—特に平安時代を中心として—

小島小五郎著

本書は著者も說かれるやうに、國史上・武家と併稱されつ〻もそれに比して從來甚しく輕視されてゐたと見られる公家の文化を、國體に本づく我が思想乃至文化の傳統の立場より考究を加へ